

<特集:ツアーで出会う>

金門島で考える東アジアと「日文系」

—「冷戦的歴史文化——東亜批判刊物会議」に参加して—

笹沼俊暁

1 発端

「ツアー」についての特集に寄せる文章の冒頭でこのようなことを言うのもどうかと思うが、元来、私は極端な出不精であって、滅多に旅行にも行かず人付き合いも好まない。団体行動は生理的に受け付けないという体質である。むしろ、「移動」「交流」「他者との出会い」の重要さは理論的には理解しているつもりであり、東海大学日文学系で活発に行われている種々のプロジェクトや交流活動、ツアー等には共感するし、応援したいと思う。学科の外に向かっては、極力東海の方法を弁護し主張し正当化を図る。しかし私は天の邪鬼なので、学科の内部においては、あえて逆に、「移動」「交流」を重視し活発にツアーに出かけることを価値とする空気の中で、自分自身は「移動」「交流」「他者との出会い」を必要最低限に止めておき、基本的に研究室で本と原稿を前に机上の空論をこねくりまわしていたという衝動に駆られる。

なぜなら、「移動」「交流」「他者との出会い」とは、人間のいかなる行為、いかなる活動においても普遍的に存在する要素であり、どれほど偏屈で非社会的、自閉的のように見える人間でも、なんらかの「移動」「交流」「他者との出会い」をおこなっているからである。ただ「外向的」な人々と比べて「移動」「交流」の分量や形式が異なっているだけの話であり、彼らが能力的・人間的・倫理的に劣っているわけではない。「移動」「交流」「他者との出会い」を重視するということは、一面的な「外向性」を競うこととイコールであってはならない。「外向性」を至上価値とする「コミュニケーション至上主義」は、新自由主義経済の競争原理とどこかで重なり合っている。自己責任の経済競争のなかで、誰も彼もが高いレベルでの「交流」を要求され、コミュニケーション能力が相対的に低い、あるいはコミュニケーションの形式がマジョリティとは異なる個人や団体は、敗者としてうち捨てられ「サ

バルタン」と化していく。「移動」「交流」「他者との出会い」を重視することは、まさにそうしたコミュニケーション弱者をどう考え、どう向き合うかという問いを含むものでなければならない。

ともあれ、それでも私とて、たまには「みんなとお外」に出かけることがある。2010年11月26日～29日にかけて、私は友人の誘いで、四人の東海大学日文系の大学院生と共に、中国大陸福建省の大都市廈門と最小2.1キロの近くにある金門に滞在した。国立交通大学社会與文化研究所主催の国際会議「冷戦的歴史文化——東亜批判刊物会議」に参加するためである。台湾、中国、沖縄、日本、韓国のそれぞれから発表者およびパネリストを招き、東アジアにおける冷戦文化および国民国家体制、そして東アジア共同体の問題について議論するのが会議の趣旨である。

金門は、中国国民党が国共内戦に敗れ台湾へと逃れた後、中華民国と中華人民共和国の冷戦の最前線となった。大金門島、小金門島を主とした12の小島から構成され、総面積は150.3397平方キロメートルである。台湾では中央至上主義の傾向が強くあり、多くの学会や学術会議が台北で開催される。その中で、周縁の中の周縁ともいべき金門で大がかりな国際会議を開くということは、それ自体が魅力的な試みに思われた。また、東海大学日文系で重視されてきた「交流」「移動」は、これまで日本本土や沖縄、韓国、フィリピンを中心としており、中国大陸の問題が看過あるいは忌避される傾向があったが、金門という特異な場所に実際に行ってみることで、大学院生たちと共に、「中国」を含めた東アジアの問題を再考してみたいと考えたのである。

本稿では、三泊四日の金門ツアーを通して考えたことを、私自身の個人的な主観から書いてみたい。一緒に参加した他の人々には、それぞれ自分なりの感想があるであろう。

2 金門の歴史と現在

11月26日の金曜日の朝、私達は東海大学校門前からタクシーに乗って台中空港へ向かった。メンバーは私の他に、東海大学日本語文学系修士課程の陳玫如、阮欣婷、宮平杏奈、大塚慶二の四人の大学院生である。前の二名は台湾籍であるが、後の二名は日本籍であり、さらに宮平は沖縄県人である。

どうして台湾の大学の「日本語文学系」に日本籍の留学生がいるのかといぶかしむ人もい

るだろうが、本来、「日本語」「日本文化」は、「日本人」「日本国」という民族や国家の枠の専有物であるべきではない。「日本人」「日本国」が所有権を持つ「日本語」「日本文化」を「台湾人」が学ぶ、という一方的な図式はいい加減打破する必要がある。「日本語」「日本文化」を道具として活用することで、台湾の大学でこそ見えてくる新しい主体的な知のあり方を模索すべきであり、日本籍の学生にもそれを共有してもらいたいというコンセプトから、東海大学の日文系ではあえて日本籍の留学生を受け容れているのである。

台中空港では、多くの大陸へ向かう旅客が荷物を掲げて行き交っていた。2008年の政権交代以来、国民党の馬英九政権は中国大陸との交流を積極的に促進する立場をとった。台湾新幹線の開通以来経営難に陥っていた国内線の航空会社が大陸への路線に活路を見出したこともあり、台中のような地方都市の国内線空港からも、直接中国大陸の各地へ行けるようになったのである。

だが私達は大陸までは行かず金門行きの飛行機に乗った。気流のため多少揺れ酔って窓に張り付く者も出たものの金門に無事に到着した。地図の上では、巨大な中国大陸のすぐそばの小さな点のように見える島なので、足を踏み外したら海に落ちてしまいそうな狭さを想像していたが、意外と大きいな、というのが第一印象だった。よく考えてみると、台中市くらいの大きさはあるのである。空港前の広場に、沖縄のシーサーによく似た奇妙な石像が立っているのが目についた。「風獅爺」という金門島の民間信仰の守り神である。もともと福建と琉球は古くから頻繁な交流があり、福州には琉球人の古い墓地もある。

「海福商務飯店」からの迎えの車に乗り込みホテルに集合し昼食を食べた後、会議参加者全員で二台のバスに分乗して「認識金門之旅」に出かけた。島の中は緑が豊かでテーマパークのようにきれいに整備されているが、その割に道幅が狭く、歩道がほとんど設けられていないのが印象的だった。現在の金門では、住民のための福利が充実しており、戦地跡や軍用施設跡を観光地とするため資金が投入されているが、全島が要塞化されていた名残で、戦車が通れるだけの道路しか造っていなかったのである。いまだにあちこちで軍の施設を見かけることができ、迷彩服の若い兵士が歩いている。

もともと金門は、清朝時代から福建省に属し、下関条約後も馬祖島と同じく日本植民地支配を受けることはなかった。一九三七年から一九四五年に日本軍による占領を受けたが植民化されたわけではなく、台湾総督府とは無関係だった。台湾本島の街を歩いていると、しばしば

日本統治時代に作られた古い日本家屋を見かけることができるが、金門にはそうした建物は皆無であり、かわりに伝統的な福建式の煉瓦作りの古い家を多く見かける。台湾で言うと鹿港のような、細い路地が迷路のように続く「老街」がよく残されており、清朝時代に作られた西洋式建築を見かけることもあった。路地を歩くのは、若い兵士を除けばほとんどが昔風の地味な服を来た老人だが、彼らが話す閩南語には、台湾本島の人々が使うような日本語からの影響がないらしい。

金門には、かつての激しい戦闘の様子を伝える生々しい傷跡が多く残されている。古い建物の壁に残された無数の弾痕や砲弾による破壊の痕、そして砲弾を避けるために地下に建設された長大な坑道などである。固い岩盤を掘削した、人一人がやっと通れる細く長い坑道を1.3キロも歩いていると、兵士の息苦しさが伝わってくる。地上に無数の砲弾が降り注いだため、地面を少し掘ると今でも大量の砲弾が出てくるという。金門滞在三日目の早朝に朝ご飯を食べるために友人と二人でホテルの近くの老街を歩いていたところ、年老いた鍛冶屋がハンマーと金床を使って手作りの何かを作っているところに出くわしたことがあった。金門では、無数に残された砲弾の硬質の鉄を用いて作った刃物が名産品になっているのである。

一九四九年に国共内戦に破れた国民党は、大陸を撤収するさいに金門に前線部隊を残し、共産党軍の侵攻を食い止めた。古寧頭戦役と呼ばれるこの戦いにより、兩岸の冷戦体制の構図が決定される。その時、「白団」と呼ばれる旧日本軍人の軍事顧問団が中華民国軍を指導したといわれる。一九五八年には、中華人民共和国の側から金門へ猛烈な砲撃が行われた。中華人民共和国では金門砲戦、中華民国では八二三砲戦と呼ぶこの戦いでは、470,000発の砲弾が使われ、中華民国側に副司令や参謀長をも含む440人あまりの死者が発生した。アメリカ軍の援助もあり、金門は何とか死守されたが、冷戦下にあって金門は徹底的な要塞化がなされ高圧的な軍事統治が行われ続けた。

国立金門大学の李福井による会議当日での報告によると、冷戦期の金門の住民は軍事施設建設のため補償なしで強制的に家と土地を奪われ、政治的な権利や民主、人権、言論や生活の自由は皆無に等しかった。住民はすべて政治と戦争のために動員され、厳しい思想統制とスパイによる監視の下に置かれた。島民は、島を出入りするのに許可証を必要とし、些細なことで逮捕や拷問、殺害がおこなわれた。軍司令官は一種の「土皇帝」として恣意的な法規を定めて君臨した。夜十時以降は外出禁止であり、酔って家に帰るところを衛兵に射殺されるこ

ともあったという。

冷戦が緩和すると、一九九四年に金門の戒厳令は解除され、二〇〇一年には対岸の廈門との間で客船の運行が開始し、「小三通」(「通商」「通航」「通郵」)が始まった。現在では、大陸からも台湾本島からも観光客が訪れ、兩岸交流の基地の一つともなっている。だが、冷戦期の傷跡と記憶はいまだに人々を呪縛し続けているといえよう。

会議の前日の夜は、「認識金門之旅」の後、全員で食事をしてからかつての軍人施設に集まり、金門の映画監督・董振良による映画『閩戦之歌』を鑑賞した。軍事施設や戦場跡、古い路地、軍人墓地など、現代の金門の様々な風景が延々と映し出され、バックに「我現在要出征」「杯酒高歌」「東方虹」「領袖万歳歌」「太陽最紅、毛主席最親」などの中華民国および中華人民共和国の軍歌とプロパガンダソングが流れ続けるだけのものだった。もともと夜に弱い上に一日の行動で疲れていた私は、半死半生の思いでこの退屈な「芸術的」映画(「芸術的」な効果を狙った映画はたいてい退屈であるが)を見続けた。単調な映画全編の中で、唯一観客をドキリとさせたのは、軍人墓地の中を全裸の少女が黙ったまま歩き、兵士の墓碑に寄り添う場面だった。

ホテルに帰る途中の夜道で、東海の大学院生たちと映画について話しながら歩いていたが、この全裸の女性のシーンについての疑問が話題にあがった。院生の一人によると、あれではまるで女性が、若い兵士を相手する慰安婦のようでないかという。監督としては、若くして戦死した兵士に対する同情と、そして金門の古い道徳観念に挑戦を突きつけたいという気持ち、そして墓地の風景に全裸の女性という視覚上の「異化効果」を狙ったのであろうが、だが、自然風景の中のヌードという発想そのものが「芸術的」にありふれたものであるし、まるで女性を物のように扱っているように見え、彼女自身の声が聞こえないのは、院生の一人の指摘するように確かに問題であろう。

映画では、延々と「風景」のみが映し出され、金門の人たちの直接の声がすべてカットされているのも問題であるように感じた。中華民国と中華人民共和国のプロパガンダソングを交互に流していたのは、金門というかつての戦場での相互の「和解」ということを表わしたかったのだろうが、聞こえてくるのが標準北京語による双方の公式的な国家の声のみであるのはやはり違和感がある。国家と国家の間で挟まれ犠牲にされた、金門の人たちの生の声が聞こえてこないのである。

ちなみにその夜道では、「越南KTV」のネオンサインも見かけた。ベトナムから来た女性の風俗サービスの店のようである。金門では夜九時半くらいをすぎると、殆どの店がシャッターを下ろしてしまうが、KTVのネオンだけが夜空に煌々と輝いていた。

3 会議で

さて、会議は翌日から、金門大学の構内でおこなわれた。以前は国立金門技術学院と呼んできたが、2010年8月から総合大学へと昇格した。大陸からの留学生を大量に迎え入れる方針だという。会場には、各地の訛りの北京語、韓国語、日本語が飛び交っていた。普段日文系の中で日本語を使って仕事をせざるを得ない私は、こういうところではなるだけ日本語を使わず、下手な中国語で通すようにしている。同行した四人の大学院生と一緒にいると日本語を使う機会ができるので、かなり離れた位置の、他大学の中文系に勤める日本語の出来ない友人たちの隣に座った。

その日は、新崎盛暉「東アジアにおける沖縄の役割」、李福井「金門冷戦的歴史与其影響」、洪徳舜「金門精神病状況」の三つの報告と、それぞれについての三人のコメンテーターによるコメント、そして会場からの質疑応答という形式でおこなわれた。発表とコメント、討論は三カ国語で行われたので、参加者は皆通訳機械のイヤホンに装着していた。だが、その日私はどうしても中国語の発表を頑張って聞こうとして、通訳のイヤホンを使用しなかったため、正直な話、中国語の討論はかなりの部分聞き取ることができなかった。だが予稿論集やPPT資料も参考にしつつ理解した限りでは、会場の参加者の多くが、金門と沖縄の相似性ということを考えずにいられない議論が展開されたように思われる。

金門は、中華民国および中華人民共和国という主権国家としての正統性を争う二つの勢力の間に挟まれて、双方のナショナリズムのために利用され、犠牲となってきた。それはまさに、戦後日本のナショナリズムがアメリカとの関係性の中で自らの位置を維持するために沖縄を利用し、犠牲としてきたことを想起させる。会議での李福井「金門冷戦的歴史与其影響」が報告した軍制下の金門の様子は、米軍軍政下の沖縄の姿を想起させる部分を含んでいる。さらに洪徳舜「金門的精神病状況」は、そうした軍制下のストレスに置かれた金門の人々の精神病罹患の様子を報告したものであるが、会場からは、沖縄における高い精神病発生率や、そ

れに対処とするためのシャーマニズムなど民間信仰の共通性を指摘する発言も出されていた。軍政下の状況下にあっては、心身に強いストレスを感じるほうがむしろ正常であるとの意見も出された。

さらに、新崎盛暉の報告によると、戦後東アジアの冷戦下で、沖縄の民衆運動は、はじめ米軍軍政下における日本復帰運動という日本ナショナリズムの表現として開始された。しかし沖縄返還と冷戦終焉を経て、日米同盟との戦いおよび軍事拠点としての沖縄を平和創出の拠点とすることを意識しはじめたという。そして国境問題において重視されるべきは国家の力関係や国際法ではなく人々の生活であり、国境を越える民衆の交流が促進されるべきと主張した。新崎の報告するこうした沖縄の位置は、金門の位置をどう考えるかにおいて重要なヒントを与えてくれるといえよう。かつての戦場であった金門は、いまや、もともと同一の生活圏に属していた対岸の廈門との「台湾」「中国」を越えた交流を深め、台湾と大陸の相互の交流と平和の拠点となっているからである。

その日の晩は、別の軍人慰問施設で会食とドキュメンタリー映画の上演がおこなわれた。沖縄の米兵相手のロックンローラーに焦点を当てた「かっちゃん 還暦越えのロックンローラー」と、韓国のスパイ長期囚をあつかった「送還」であったが、夜の苦手な私はまたもやすでに半死半生となっていて、観ることを完全放棄してボーっとしていた。会食の場での社交がすでに私にとって強いストレスだったのである。若くて元気のある院生達はさかんに色々な人々とコミュニケーションをとり、貴重な話を聞いていたようだが、私はもう勘弁してくれ、という気分だった。まことに申し訳ないが真面目なドキュメンタリーよりは、怪獣か宇宙船が出てきて爆発がおこる映画を見せて欲しかった。

会議二日目は、場所を変えて国立公園の中の「中山林遊客中心」でおこなわれた。発表は池上善彦「戦後日本の左派におけるアジア連帯」、銭理群「中国国内的冷戦背景－在台湾学術討論会上的発言」、白楽晴「東亜共同体構想及韓半島分断体制」だった。国境を越えたアジアの民衆の連帯と東アジア共同体の構築という点が中心的に話し合われた。

池上の発表は、1950年代の国民文学論争や、山谷の日雇い労働者市場での労働運動、そして1970年代の日本赤軍が出会った第三世界の国際主義など、戦後日本の左派運動における「アジア」との連帯の意識の系譜をさぐるものだった。そして北京大学の魯迅研究者・銭理群は、冷戦期の毛沢東の外交政策に、伝統的な中華思想がすでにあらわれていると指摘したう

えで、現代の中国に蔓延する過度の愛国主義と中華思想を批判し、警鐘を鳴らす発表をおこなった。

この両者の問題意識は、日本や中国の国内における自文化中心主義を批判し、各国の和解と交流を促進すべきとするものである。私はその問題意識自体には諸手をあげて賛同したいと思うし、厳しい思想統制がしかれているであろう中国でこのような批評意識を持つ老学者・銭理群は敬服に値する。ただ、国民国家という近代の制度に対する歴史・社会学的な認識と整理において少々甘い面があるようにも思われた。一口にアジアの連帯とか民衆の交流といても、それは民族や国民国家の枠を前提とした上でのものと、そうした枠そのものの自明性を突き崩すものに分けて考えるべきだからである。

池上による戦後日本の左翼運動におけるアジア観の歴史的整理は、この両者が混同されてしまっているように思われた。私の理解では、池上が高く評価する1950年の国民文学論は、戦後の占領体制の中で、アメリカによる支配と国家主義に抵抗する形で民主的な国民国家体制の構築を求めたのであり、民族や国民そのものを否定したのではない。だからこそ竹内好らは、魯迅ら北京語による中国近現代文学を、あるべき国民文学の模範として賞賛したのである。だが私の知る限り、竹内らが、中国国内の多様性や複雑な民族問題、国境を越えた移動や交流について何らかの考察をおこなった形跡はない。さらに当時、沖縄での国民文学論は、本土復帰論の文脈でおこなわれたのである。

また銭理群の発表は、近代的な愛国主義が前提とする主権国家の枠組が、前近代的な中華思想とは根本的に異なる点を理解していないように思われた。現代の中国の愛国主義が、伝統的な中華思想の残滓をひきずっているという彼の認識自体は間違いではないだろう。しかし本来、前近代的な中華思想は、現代の主権国家とは異なり明確な領域や国境の概念を持たない。たとえば尖閣諸島や台湾のような辺境の小島の帰属にいちいち目くじらを立てるのは、中華思想が理想とする「王道政治」とはいえないのである。また、前近代の中華思想では、皇帝権力に反対することはできないものの、基本的に民衆の生活と社会、言語のあり方は自由に任されていた。「鼓腹撃壤」こそが理想の政治であり、「中国人」という意識もほとんど無かったであろう。無論、中華思想をそのまま現代に適用することはできないが、こうした前近代の人々の意識や感性、生活のあり方から、現代の我々が学ぶべきものは多いようにも思われる。

そして最後に、現代の韓国を代表する批評家・白樂晴の展開した議論は、二日間の会議の全体にわたる理論的支柱としての意味をもっているように思われた。彼は、38度線を境にした朝鮮半島の分断状況の克服を主張するが、しかしそれは、南北統一によってより強大な国民国家の建設を目指すべきものではなく、東アジア全体における対話と和解、交流の促進へとつなげるべきものだと言うのである。そして東アジア共同体の構築は、それさえもそれ自体が目的ではなく、最終的には世界全体における国家の廃棄に至るまでのステップとしておこなわれべきだとする。実に雄大な構想である。

正直に言うと、私は以前読んだことのある、彼が1970年代に書いていた朝鮮民衆文学や民族文学の構築を目指そうとする議論が頭にあり、国家の廃棄を目指す今回の議論は、それとはずいぶんかけ離れたものであるように思われた。韓国では「民族」という言葉に中国語や日本語とは異なる独特の意味があるらしいが、それにしても、以前白樂晴が書いていた民族文学論を読んだ限りでは、国民国家の枠を越えようとする主張がすでに盛り込まれていたとは、到底思えなかった。今一度、彼の著作を読み直す必要があるのだろう。私の誤読なのか彼の転向なのか。

それはともかくとしても、白樂晴の議論は、彼自身が直接的な交流をもつ柄谷行人が『トランスクリティーク』『世界共和国へ』『世界史の構造』等の著書で述べる、「資本－国家－ネーション」の三位一体構造の打破をめぐる議論と近接するものといえる。ただ、柄谷は、抽象的な理論水準において群を抜いているにもかかわらず、それをどう実現させるかという実践の面において弱い。憲法第九条の実行と国連改革、地域通貨の発行などの柄谷の提案は、全面的な首肯はできるものの空想的な水準にとどまっているのである。それに対し白樂晴の主張は、南北分断という個別的な政治事例の現実的な解決法を足がかりとして、国家への廃棄にいたる道筋をより具体的に示そうとしており、私達により確かな希望を与えてくれるように思われた。

4 金門で考えたこと

二日目の会議が終わった後は、食事会ののち、みんなでお土産を買いに行き、ホテル前の道路の分離帯のガジュマル並木の下で夜遅くまで飲み続けた。二日目の会議で私は三回質問に立ったが、質問が長すぎると司会者に注意されて後々まで冷や汗をかいていたので、飲ん

で忘れた。沖縄や韓国の民謡が披露され、私は「大きな古時計」の秋田弁バージョンを歌うことになった。まさか金門で秋田弁の歌を歌うことになるとは思わなかった。飲み会の最後は「インターナショナル」の合唱になったが、昔の金門なら、即刻憲兵が飛んできて全員監獄行きだったろう。ただし、ホテルの他の客からうるさいという苦情が来たらしく、パトカーがやってきて背の高い警官が三人、私達に注意をうながしに近づいて来たときは、さすがに一同、一瞬ドキリとした。

今回の金門会議では、「中国」というものが一つの重要なポイントになっていたように思う。台湾の大学の日文系や台湾研究所でおこなわれる教育や学術、交流活動は、多くの場合中国大陆を除外していることが多い。金門島という大陸と目と鼻の先にある土地で、大陸の学者をも招いておこなう国際会議は、台湾の日文系や台湾研究所ではなかなか企画されないものである。なぜなら、台湾の大学の多くに共通した傾向として、中国に対する嫌悪と反発から日本語の世界に入り、あるいは台湾文学を研究しようとする人々が少なくないからである。台湾本土意識あるいは台湾ナショナリズムが、少なからずそこに介在している。

東海大学日文系でも、そうした傾向がまったく無いとはいえないように思われる。「移動」「交流」「コミュニケーション」を学科の理念として掲げてはいるものの、実際におこなわれているのは日本、沖縄、韓国、東南アジアの問題がほとんどであり、中国だけがスッポリ抜け落ちている。良い悪いは別として、現実の現代の台湾社会は、中国大陆との「移動」「交流」「コミュニケーション」なくして存立することができないにもかかわらず、である。日本語や日本文学というものの歴史性を考えてみても、本来、中国の問題を除外することは絶対にできない。中国を除外して「日本」を考えようとする台湾の日文系のあり方は、「漢意」を徹底的に否定し純粋で理想的な「日本」の姿を古代に見出そうとした、近世後期の本居宣長による国学思想をすら想起させる。こうした状況に違和感を覚えるからこそ、私は、今回の金門会議への参加を院生に呼びかけたし、自分の研究としても、最近、リービ英雄論の執筆を通じて中国の問題に取り組んでいるのである。夏には「一人中国ツアー」を敢行もした。

台湾では、ほぼすべての思想や学術上の議論が、台湾独立か中国統一かという、二項対立をめぐる展開されている。台湾は中国の一部であるとする主張と、台湾は中国とは異なる一つの独立した国家であるという主張は、国民党と民進党の政治対立の背景ともなっている。だが、こうした双方は、その根底において同じ枠組を共有した鏡像関係にあるといえる。どちら

も、「中国」あるいは「台湾」という国民国家あるいは主権国家の枠を前提として争っているからである。主権国家と国民国家の概念を前提として、「本来あるべき中国」の国境線を、台湾の西側に引くべきか東側に引くべきか、という議論をしているのである。

そしてこうした「台湾」「中国」あるいは「中華人民共和国」「中華民国」という国民国家の正統性を争う闘争の間で虐げられ、その矛盾を集中的に背負わされてきたのが、金門の人々なのである。さきにも述べたように、金門には、台湾本島の街でよく見かける日本統治時代に建てられた日本建築が存在しない。台湾ナショナリズムの重要な要素の一つとなっている日本統治時代の歴史の記憶を、金門の人々は持ち合わせていない。そして、一九四九年以降は、中華人民共和国の人々との共通の記憶も金門の人々は絶たれてきたのである。

ちなみに、こうした話を、台中に帰ってきてから私は、インターネット上の「Facebook」に書いてみた。すると、以前の勤務校での同僚で中国思想史を専門とする、金門出身の友人が次のような返信を書き込んできた。「共通の歴史記憶が無いため運命共同体の感覚もないということですか？私には確かにそうした思いがあります。私は19歳の時、1985年1月に金門を離れ、台湾にきましたが、長い間台湾文化に相容れることが出来ませんでした。夜まで軍歌を歌い、反攻大陸のスローガンを叫ぶのが、私の子供の頃の金門での記憶でしたが、台湾人を見ると安逸にふけり贅沢三昧をしています。今でも金門は取るに足らない存在で、歴史の小さな記念品に過ぎず、その存在を「気にかける」議論はなかなかありません。Sasa先生はどう思いますか？(原文は中国語)」。台湾独立派や中国統一派は、このような声に対して、どのように応答するのだろうか？

さらに、台湾独立派および中国統一派の双方がおそらく漠然と前提する「中国」という主権国家の枠組は、それほど自明なものではない。先にも述べたように、伝統的な中華思想による東アジア世界では、明確な国境の概念は存在しなかった。もともと金門と廈門は同一の生活圏に属し、「中国」対「台湾」などという近代以降の抽象概念とは無縁の地域的生活意識の中にあっただのである。そして確かに現代の台湾と中国大陸には、政治や社会、文化の面で大きな差異があるが、しかし、たとえば台湾海峡を境とした台湾と福建省の都市市民の間に存在する意識と生活の差異の大きさは、福建省や上海の都市生活者と陝西省の農民の間に存在する意識と生活の絶望的な落差に比べて、どれほど大きいというのだろうか。内陸部の貧しい農民やウイグルのイスラム教徒からすれば、台北市民も上海市民も、どちらも等しく搾取する側に他

ならないだろう。現実の中国大陸は無限といってもいいほどの多様性に満ちた空間であり、「中国」という単一の表象によってくれるものではない。そして「台湾」「中国」「日本」などという枠組を単位としてのみ物事を考えていると、現代の資本主義がもたらすより本質的な格差と搾取の構造を見逃してしまいかねないのである。

言うまでもなく、清朝以前の時代には、一般民衆は明確な「台湾人」「中国人」などという意識をもっていなかった。それぞれの生活世界における多様な社会文化と「声」があったのであり、そこには近代国家の領域性と無関係の、人の移動や交流活動が絶えず存在した。近代国家は、そうした人々の生活世界の中にまで徹底的な管理を施し、「中国」「台湾」「日本」「韓国」などという枠に人々を封じ込め、その中でのみ「声」を発することを許した。現代の中国政府や台湾政府が喧伝する「多元文化主義」なるものは、国民国家の枠内での国家の管理を前提としたうえでの「多元文化」である。しかし、中国の「少数民族」は自ら望んで中国国家の「少数民族」となり、台湾の原住民は自ら望んで台湾国家の「多元文化」の一構成員になったのだろうか？国家主義を前提とした多元主義ならば、かつての大日本帝国や満州国ですら主張したことを思い起こすべきでないだろうか。

これから必要なのは、「台湾」「中国」「日本」という枠組を取り払った上で、人間の移動や交流を考えることであり、人々の微細でかつ多様な「声」に耳を傾ける姿勢であろう。そのために、「ツアー」という方法を一つの有効な手段として用いることができるのかもしれない。もっとも私自身は、面倒くさいし基本的に知らない人に会いたくないので、あまりやりたくないが。正直に言うと、「民衆」というものを、私は素直に信用することができないというのもある。東海日文系では、大学の外に出て国家の枠を超えた社会の様々な人々と交流することを重視しているし、今回の会議でも、国境をまたぐ民衆の連帯と交流というのがしばしばキーワードとして使われた。しかし、「民衆」はべつに天使ではなく、状況次第で国家への抵抗の主体ともなれば、逆にむき出しの暴力と加害の担い手ともなることを忘れてはならない。

しかしまあ、気が向いたら今後もたまには何かやってみよう。

さて、今回の金門ツアーの総括をしよう。まとめていえば、私も少しは旅慣れたものだ、ということになる。以前私は、慣れない土地に旅すると必ず一つは派手な失敗をやらかしたものだ。初めて台湾に来たときは、初日でいきなりパスポートを無くしたし、台湾に引っ越してきて二週間目に街で犬に咬まれ、その翌週にバイクにひかれた。学会出席のために京都に行った

ときは帰りの飛行機に乗り遅れるなど、ろくなことがない。だが、今回の金門の旅では、特に失敗はしなかったように思う。かわりに、夜にみんなからはぐれて一人で道に迷ったり、ホテルに家の鍵を忘れたり、空港で預けた荷物を間違えて台北に送られてしまったりした大学院生もいた。失敗を経て人は強くなるものであるから、あまり気にしないように。

(ささぬま としあき 東海大学日本語文学系)